池田家文庫等貴重資料展

岡山城下町をあるく

備前国岡山城絵図　（⊕T3-84）

期間：平成16年10月23日(土)～11月1日(月)

会場：岡山大学附属図書館特殊資料展示室

岡山大学附属図書館《2004》

岡山城下町あるく

2004年度 展示会解説

はじめに

現在の岡山市中心街は、江戸時代の岡山城下町を基礎としている。JR鉄道で大阪方面からやって来ると、旭川を越えたところで列車は南に大きくカーブする。これは、ほぼ東西方向に真直ぐ進んできた線路を、かつての城下町の西の縁に沿う形で敷設し、岡山城のほぼ真西に岡山駅を設置したためである。この線路と駅の位置は明治時代以来変わっていないのだが、それ一つをとっても、現在の岡山の街づくりがかつての城下町に強く規定されていることが分かる。

岡山の城下町建設は、戦国大名の宇喜多直家によって始められ、その子の秀家の時代に本格化した。その事業は小早川秀詮を経て、池田忠継・忠雄に引き継がれ、池田光政の時代に完成した。池田家文庫には、光政が鳥取から岡山に入部した前後の城下町の状況を示す絵図をはじめ、江戸時代の岡山城下町を描いた絵図が何種類も残されている。今回はそのうちの一つである慶安年間(1648～51)に作られたと思われる絵図をもとに、当時の岡山城下町を歩いてみよう。

西国街道から川東へ

江戸時代、京都・大坂から岡山に至るには、西国街道を西に進んだ。岡山の一つ手前の宿は、藤井宿(現岡山市藤井)。中世の街道はこのあたりから真直ぐ西に延びていたのだが、宇喜多秀家によって南西方向に向かって付け替えられた。

秀家の父直家は、藤井の直ぐ東の上道郡沼城(亀山城ともいう。現岡山市沼)によっていたが、備前東部を支配していた津高郡金川(現御津町金川)の松田氏を滅ぼした後、石山の地に本城を移した。この石山は、現在地でいえばNHK岡山放送局があるあたりである。この城下に西国街道を直接引き入れるために、秀家は道筋を南に付け替えたのである。

原尾島・国富の村を抜けると、森下町の総門が見える。ここからが城下町である。森下町・古京町・片上町と町屋が続く。やがて正面に国清寺の大きな甍が見え、その手前で道は西に直角に折れ、旭川に出る。この旭川の東側(川東)の地区は、岡山城下町の中でも開発が遅れたところで、秀家の時代にも街道筋以外は田地が広がっていた。

忠雄時代になると重臣たちの下屋敷があちこちに作られるようになり、旭川の付洲には「おいまわし」(馬場)や「御花畠」も作られ、城下町の休息空間とされた。光政時代には、川東の様子が大きく変わった。鳥取から移転した国清寺や三友寺に広い寺地が与えられた。国清寺が旭川の渡河地点を防備する位置にあることも注目される。下級家臣の屋敷地が広がり、足軽や忍びの屋敷地なども作られた。「御花畠」には一時徳川秀忠を祀る台徳院霊屋が置かれたが、後には武家地として再開発された。東山には徳川家康を祀る東照宮も造営された。

城郭と石垣・堀

旭川には京橋・中橋・小橋の三つの橋が架かっている。秀家によって設けられたもので、岡山藩領内では旭川に架かる唯一の橋である。三つの橋に繋がれた旭川の中洲には、東西の中島町が置かれた。東中島町は馬宿で、城下の馬方が多く居住した。西中島町は、城下での旅籠屋営業を独占的に認められた町であった。

城下に入った西国街道は、西大寺町で直角に北に曲がる。道筋に沿って柴町・下之町・中之町・上之町と商人町が続く。城下町屋の中心街で、城下町の行政を司る町会所も柴町に置かれていた。町会所に隣接して、時を告げる鐘撞堂もあった。町屋には、領内各地から集められた商人たちが店を構え、領内外の流通を担った。

町屋の内側には、内堀で守られた丸の内(内山下ともいう)があった。その中心はいうまでもなく本丸で、直家時代の石山からその東方の丘に秀家によって移されたものである。当時この丘を「岡山」と呼んでいたという。三段の高い石垣で囲われ、藩主が居住する宏壮な御殿と三層六重の天守閣がそびえていた。本丸の西南の丸の内には、重臣の屋敷地が建ち並んでいた。こうした丸の内の構築は秀家によって実施されたものであった。彼はそれに先だって旭川の治水

工事を行い、あわせてその流路を本丸あたりで大きくわん曲させ、城郭を取り囲むようにして南流する形に付け替えた。これによって、旭川が明確に城下町の東の防御線となった。

町屋の西側は中堀（古川）で、その外側には武家地が配置されていたが、小早川秀詮時代にさらにその外側に外堀が作られた。秀詮は、宇喜多氏が関ヶ原合戦で滅亡した後に岡山城に入ったもので、外堀は城下町の西の防御線とされた。外堀には、北に伊勢宮口、西に山崎町口・常盤町口・大雲寺口、南に紺屋町口、と五つの口が設けられ、門の周辺には蓮昌寺・大雲寺・薬師堂（円覚寺）・観音堂（岡山寺）などが移転され、門を固めるように配置された。その周辺は寺町となった。石垣と堀は、城郭とともに藩の武威を示すものであった。

西川と街道／旭川と船入

次いで池田氏の時代になると、外堀の外側の整備が進んだ。伊勢宮口から北へは津山往来が延びていたが、それに沿って下級家臣・軽輩の屋敷地が並ぶ番町が作られた。番町の北の河原沿いに東照宮の御旅所があった。毎年行われた東照宮の祭礼は城下町最大のイベントで、東山の東照宮と御旅所の間を往復する神輿渡御行列は、藩の武士と城下町の町人が総参加する華やかなものであった。

外堀西側の田町一帯も武家地として地割りされ、さらにこれら武家地の西側に忠雄によって西川が掘られた。これは既存の農業用水を改修したもので、城下町の拡大にあわせて、その西の境界を明確にするとともに、外堀のさらに外側の防御線とすることを目的としたものであった。

光政時代になると、西国街道の西の出口が付け替えられた。従来は山崎町口から西に出ていた西国街道を、山崎町に沿って北上し丸亀町で西に折れ、富田町から真直ぐ西に出るようにしたのである。あわせて西川の先にも、街道に沿って岩田町・万町が作られた。

大雲寺口から西へは庭瀬街道が延びていた。その周辺には紺屋町・油町・大工町・児島町など職人が多く居住する町があった。また、外堀の南の船頭町に忠雄によって船手の屋敷地や藩の麦蔵などが作られた。

京橋を渡った旭川右岸の船着町には船着き場があった。川口から上下する川舟は、ここで荷揚げし、様々な物資が城下町に持ち込まれた。城下町の南の浜野村には、御船入があった。ここは、百艘以上の藩の御船が繋留され、船道具小屋なども置かれた船手の基地であった。さらに南の福島村には藩の川口番所が置かれていた。瀬戸内海を航行する大型の廻船は、ここで積み荷を小型の上荷船に積み替えた。旭川は全国を繋ぐ大動脈である瀬戸内海に直結していた。

おわりに

岡山藩は、備前一国と備中五郡のうちに領知を持つ外様の雄藩で、朱印高は31万5200石、岡山城下町はその政治・経済・文化の中心であった。18世紀初頭の人口は5万3539人、内訳は武家方2万2904人（うち奉公人1万1698人）、町方3万635人であった。

もう一度岡山城下町絵図をながめてみよう。東の中央部に、旭川を背に西を内堀で囲まれた丸の内がある。丸の内の内部はさらに二重の堀によって区画され、本丸・西の丸・二の丸に分かれていた。ここが藩の中枢で、藩主や重臣たちが居住した。

内堀の外側で西側を中堀（古川）で画された地区は町人地で、ここを西国街道が通っている。内堀と外堀にはさまれた地区には、武家地が連なっている。外堀の外側には、堀に沿って寺町があり、その外側に町人地が、さらにその西側に下級家臣の屋敷や軽輩・足軽などの組屋敷が配置されていた。そして、城下町の西の端を画するように西川が流れていた。

このようにみてみると、岡山城下町は、旭川と西川にはさまれ、その内部に何重もの堀と身分別の居住区とが層を成して重なっており、あたかもサンドウィッチのような構成をとっていることが分かるだろう。これは明らかに西方に備えた空間構成であり、具体的には毛利氏を意識したものであった。

これに対して旭川の東側は、西国街道に沿って町屋が並び、その周辺に重臣たちの下屋敷や下級家臣・足軽などの組屋敷、寺地などが混然と存在していた。光政の子の綱政によって、町地の北の端に接する形で御後園（後楽園）が造営された。

展示品解説

1 びぜんのくにおかやましろえず 備前国岡山城絵図

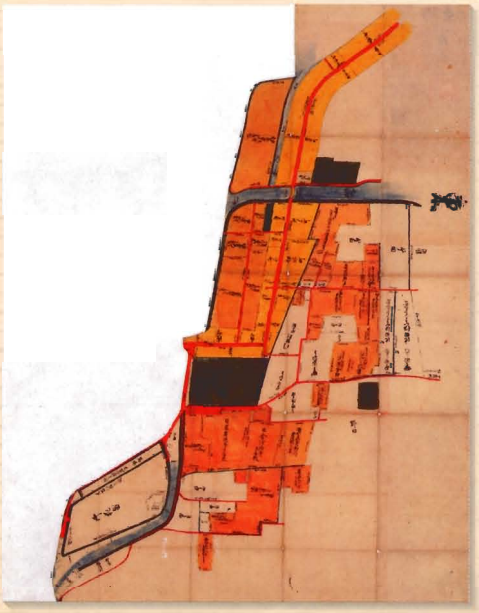
(⊕T3-84)　正保年間(1644～48)　242.4cm×196.7cm

江戸幕府によって作成を命じられた国絵図とともに提出された城下絵図。丸の内の櫓の配置や敷地の広さなども克明に描かれている。城下町内の武家地・町人地・寺地の区別、町方の町名なども書き込まれており、旭川付洲の「御花畠」には、台徳院霊屋が描かれている。「松平新太郎」は、当時の岡山藩主池田光政のこと。

2 びぜんのくにおかやまじょうかず 備前国岡山城下図(川東)

(※T6-8)　慶安年間(1648～52)　94.7cm×65.0cm

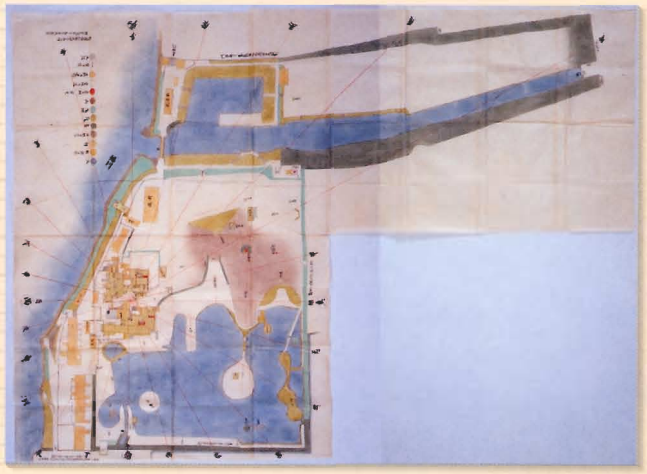
4枚1組で城下町全体の絵図となるものの1枚。旭川の東側(川東)の地区を描いたもの。武家地は淡い煉瓦色、町人地は鮮やかな黄色、寺地は濃い緑色、道は朱色、で塗り分けられている。国清寺や家老たちの下屋敷が目に付く。門田村分の野田も多く残っている。



3 いけだおうみしもやしきのず 池田近江下屋敷之図

(※T5-43)　明治元年(1868)　155.4cm×214.5cm

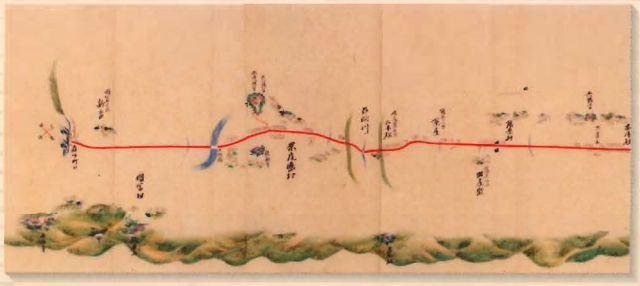
川東にあった家老池田近江(長常、片桐池田氏)の下屋敷を描いた絵図。広大な敷地に立派な庭園を備えたくつろぎの空間であったことがよく分かる。1間(1.8m)が4分(1.2cm)で描かれているから、縮尺は150分の1。朱色の方位線は、家相を見るために付けられたもの。



4 みついしくにざかいよりもりしたまでえんどうのず 三石国境ヨリ森下迄沿道之図

(※T8-100)　年代未詳　25.3cm×12.3cm

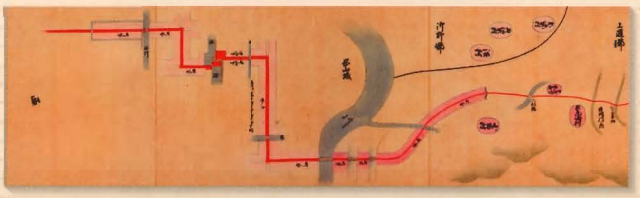
播磨との国境である船坂峠から城下の森下町口までの西国街道の沿道の景観を極彩色で描いた図。折本形式になっている。寺社や古城跡などの名所が書き込まれている。



5 おかやまよりわけぐんみついしむらふなさかとうげまでおんみちすじえず 岡山より和気郡三石村船坂峠迄御道筋絵図

(※T8-99)　年代未詳　28.2cm×694.0cm

船坂峠から岡山城下までの西国街道の沿道を描いた図。茶屋や一里塚の表示はあるが、全体の描写は簡略である。この図では、城下町内の道筋も書かれている。



6 池田家履歴（いけだけりれき）

(A8-57)　年代未詳　23.7cm×16.2cm

岡山藩主の事績を中心に藩政の重要事件を編年体で記録した、いわゆる「池田家履歴略記」の諸本のうち、最も原本に近いと考えられているもの。欠本があり、現存は26巻26冊。寛永19年(1642)に「花畠」の項があり、その由来や変遷が記されている。

7 京橋掛替ニ付渡り場絵図（きょうばしかけかえにつきわたりばえず）

(M3-202)　弘化3年(1846)　119.7cm×55.7cm

京橋は旭川に架けられた三つの橋のなかでは最も長く、たびたび修繕・掛け替えが行われた。その作事中は通行できないため、迂回路と2ヶ所の「惣渡場」が設けられ、船で川を渡した。この図は、その状況を示した略図。京橋周辺の様子もうかがえる。

8 京橋作事紀　3冊（きょうばしさくじき）

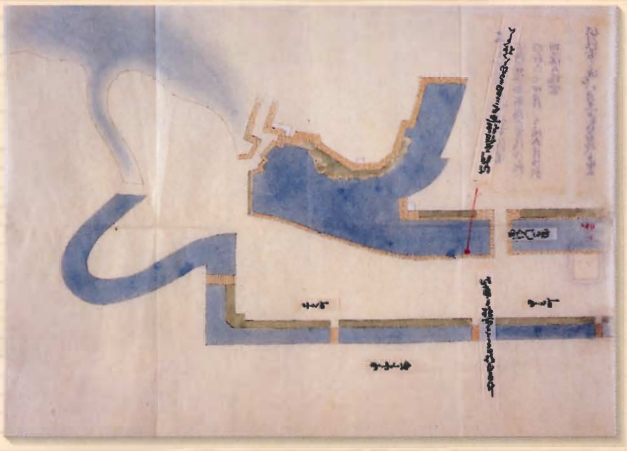
(M3-186～188)　延宝元年～慶応4年(1673～1868)　27.4cm×20.2cm

江戸時代前期から幕末までの京橋の修繕・掛け替えについて、記録したもの。延宝元年の洪水で流れた京橋の柱6本の繕いから慶応4年の繕いまで、それぞれの作事の経過が記されている。こうした作事は主に藩が費用負担し、藩の管理のもとに実施された。

9 上之町裏石垣損所絵図（かみのちょううらいしがきそんしょえず）

(※T7-28-1)　安永2年(1773)　22.6cm×38.6cm

西御門土橋の際の内堀の石垣が、長さ3間(約5.4m)・高さ2尺(約60cm)にわたって破損した。この場所は既に明和6年(1769)に修復を願い出て、幕府の許可を得ていた場所であったが、修復が済む前に再び崩れたため、改めて願いを出すべきかどうかを幕府役人に伺った時に添えた絵図。城下の石垣や堀の修復には一々幕府の許可が必要であり、その願いには必ず詳細な絵図が添えられた。



10 岡山城二之曲輪堀端石垣修復願につき書付（おかやまじょうにのくるわほりばたいしがきしゅうふくねがいにつきかきつけ）

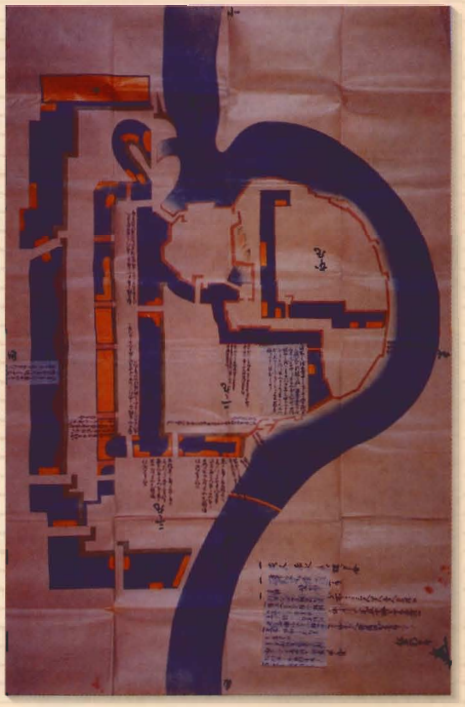
(※T7-28-3)　安永2年(1773)　16.3cm×44.6cm

9の損所について内々に幕府役人に尋ねたところ、改めての願いは必要ないとの返答であったので、修復を行ってもよいと国元に知らせた用状。筆者の辻六郎大夫は、当時の岡山藩江戸留守居。安永元年(1772)6月から同3年(1774)7月まで勤めている。

11 備前国岡山城堀浚修復願絵図（びぜんのくにおかやまじょうほりさらえしゅうふくねがいえず）

(※T7-29-1)　万治2年(1659)・寛文13年(1673)　147.2cm×94.6cm

洪水で埋まった堀の砂を浚え取ることを、万治2年に幕府に願い出た際の絵図。黄色が洪水で埋まった砂を示しており、その量は坪にして五千坪にのぼると記されている。この絵図に寛文13年に付紙が付けられ、新たな願いが出された。それによると、万治の洪水の堀浚えは寛文13年になっても終わっておらず、引き続き堀浚えを行いたいこと、加えて朱色の部分は悪水抜きの樋口が砂で埋まったため、あわせて浚えたいと願っている。



展示品解説

12 おかやまじょうほりさらえねがいにつきろうじゅうれんしょほうしょ 岡山城堀浚願いにつき老中連署奉書

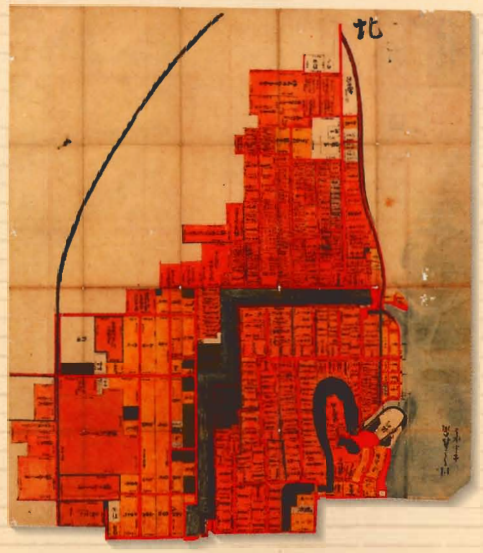
(※T7-29-2) 万治2年(1659) 40.7cm×56.5cm

11の絵図によって万治2年に行われた松平新太郎(池田光政)の願いを許可した幕府老中の奉書。当時の老中である酒井雅楽頭(忠清)・松平伊豆守(信綱)・阿部豊後守(忠秋)・稲葉美濃守(正則)の4人が、将軍(家綱)の意を奉じて伝えている。

13 びぜんのくにおかやまじょうかず 備前国岡山城下図(川西・北)

(※T6-11) 慶安年間(1648～52) 79.6cm×68.6cm

4枚1組の城下町絵図のうちの1枚。旭川の西側(川西)の北部(柳屋町通以北番町に至る)を描いている。色分けは2の絵図に同じ。外堀北の番町に、細かな屋敷割りがなされているのが分かる。北の端に白地に「南方村」と書かれた所に東照宮の御旅所があった。



14 とうしょうぐうおんさいれいしょじどめ 東照宮御祭礼諸事留　14冊

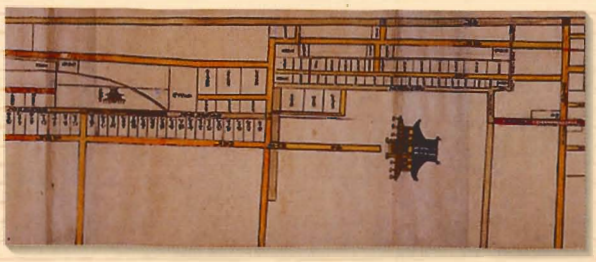
(※C7-616ほか) 安永3年(1774)～元治元年(1864) 14.4cm×37.6cm

徳川家康を祀る東照宮が、正保2年(1645)池田光政によって東山に勧請された。翌年から慶応3年(1867)まで毎年行われた東照宮祭礼は、城下町最大のイベントとして家中の武士や城下町の町人が総動員された。祭礼を記録した史料も池田家文庫にいくつか残されており、この諸事留もその一つ。祭礼の次第、供奉・警固の役人名などが記されている。

15 にしがわおおようすいすじまちなみえず 西川大用水筋町並絵図

(※T6-6) 年代未詳 32.4cm×929.5cm

滝本町から二日市町まで西川沿いの町並みの様子を描いた絵図。武家地の屋敷割りや寺社の様子と、町中の道・溝・橋などの情報が書き込まれている。西川には10本の橋が架かっていた。



16 おかやまえず 岡山絵図

(※T6-24) 元禄年間(1688～1704) 158.2cm×137.3cm

江戸時代中頃の岡山城下町の様子を示す絵図。畳紙部分に家臣の屋敷割りが細かく記されている。色分けは、士町は白色、町屋は黄色、道は朱色、川は浅黄色、寺は薄紫色、足軽屋敷は鼠色、下屋敷は黄土色、野田は白緑、藪は緑青、土手は草ノ汁、古関之木は白緑、新関之木は白、となっている。東山の東照宮がはっきり描かれている。

17 びぜんのくにおかやまじょうかず 備前国岡山城下図（川西・中）

（※T6-10）　慶安年間（1648～52）　84.6cm×102.1cm

4枚1組の城下町絵図のうちの1枚。旭川西側の中央部分（北城内・柳屋町から南大雲寺町通りに至る）を描いている。堀の幅や本丸東側の川幅が細かく記されるなど、読み取れる情報が多い。

18 ごじょうかちょうすういえすうならびにだんじょにんずうありびとあらためちょう 御城下町数家数并男女人数有人改帳

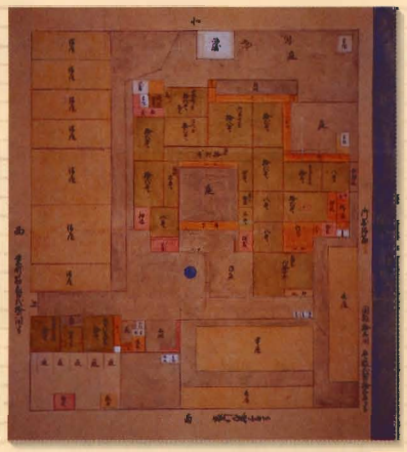
（※L1-13）　宝永4年（1707）　27.7cm×20.1cm

岡山藩が領内の家数・人数を一斉に調査した時の記録。身分・職業別に細かく集計されており、町方分は家数7,735戸、人数30,635人（うち男15,727人・女14,908人）であった。城下町の町方人口はこの頃がピークで、以後下降線をたどり幕末期には2万人を少し越える程度にまで減少した。これは城下町商業の衰退と関係していた。

19 ちょうかいしょえず 町会所絵図

（※T4-3）　年代未詳　70.0cm×62.8cm

城下町の行政を司る役所である町会所の絵図。寛文9年（1669）栄町に設けられた。町方の責任者は惣年寄（初めは大年寄といった）で、数人が勤めた。町内は十数町ずつの組に分かれ、1つの町組を1人の惣年寄が管轄した。各町には、名主（初めは目代といった）・年寄・五人組頭が置かれた。「御用聞所」「御使者ノ間」「日次ノ間」などは町奉行を初めとした藩役人が詰める空間で、「惣年寄用場」とその周辺が町方役人が事務を執る空間だろう。南東の隅には、「牢屋」も見える。



20 しせいていよう 市政堤要　24冊

（A4-1～24）　年代未詳　26.7cm×19.1cm

およそ寛文年間（1661～73）から万延年間（1860～61）にわたる岡山城下町に関わる法令を編纂したもの。城下町の運営・商工業・流通・交通・生活・習俗など、当時の城下町の状況を知ることの出来る基本史料である。ただし、全35巻のうち巻1が欠けている。提示したのは、巻28の「鐘撞堂之事」。鐘撞堂は寛文6年（1666）に建てられ、3階建て。4人の鐘撞役が2人ずつ交代で時を知らせたが、鐘を撞く数を間違えて処罰されることもあった。明治以降も鐘は撞かれていたが、第二次世界大戦の岡山大空襲で焼失した。

21 ほうれいしゅう 法例集　15冊

（E2-1～15）　年代未詳　27.0cm×20.0cm

およそ寛永19年（1642）頃から文政7年（1824）頃までの岡山藩の重要法令を編纂したもの。岡山藩政の動向を知るための基本史料。提示したのは、巻7・第45「礼式」の部分。数万人の人口を抱える城下町では、毎日生み出される大量の塵芥や糞尿の処理が大きな問題であった。このうち糞尿については、領内の農民が汲み取りに訪れ、耕地の施肥とした。しかし、農民の対応が「無礼」であるため、「肥田子荷籠」に郡の印を付けさせて取り締まることにした。食料の提供を初め、近隣農村とのつながり抜きでは、城下町の生活は1日として送ることはできなかった。

22 しもいずしちょうそうえず 下出石町惣絵図

（※T6-2）　元治元年（1864）　86.8cm×72.7cm

町内の砂場屋治郎吉が描いた下出石町の略図。当時の町人町の様子を知ることができる絵図である。道路に面し、間口が狭く、奥行きの深い、町屋特有の屋敷割りがよく分かる。旭川に面しており、木屋（材木商）や大工が多いのがこの町の特徴である。

23 びぜんのくにおかやまじょうかず 備前国岡山城下図（川西・南）

（※T6-9） 慶安年間（1648～52） 82.4cm×72.2cm

4枚1組の城下町絵図のうちの1枚。旭川の西側の南部（大雲寺町以南二日市に至る）を描いている。南に下るに順って、武家地・町人地・寺地が混在し、野田も目立つようになる。

24 おふないりえず 御船入絵図

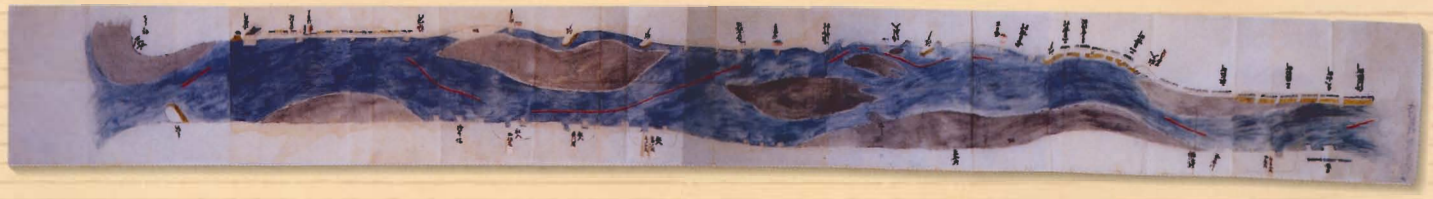
（※T8-34） 年代未詳 56.2cm×123.4cm

岡山藩の御船入の全景と御船繋ぎの様子を描いた図。高嶋丸・住吉丸・海牛丸をはじめ、藩が所有していた多数の関船・小早・飛脚船・引船・渡船・川船などが書き込まれている。敷地内には、船道具小屋・舟番小屋・加子長屋などもあった。

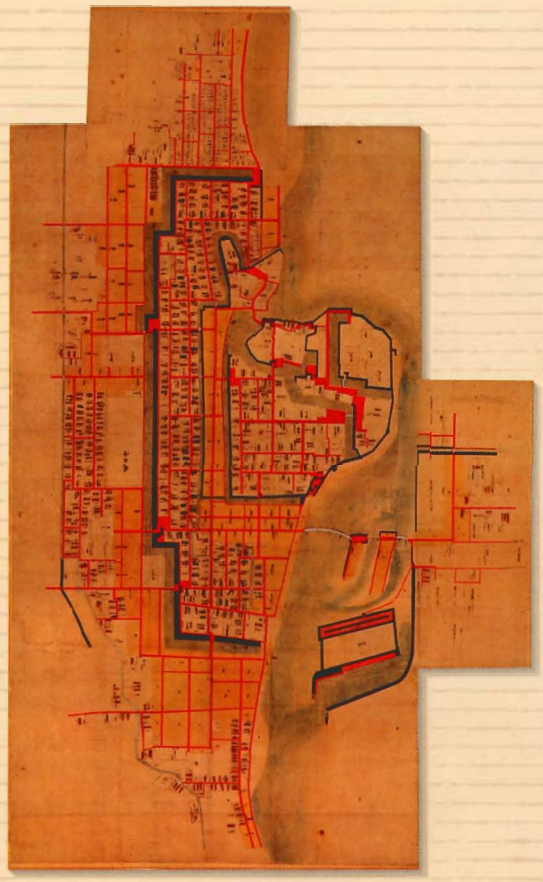
25 おおかわすじうまりほりさらえしたえず 大川筋埋り掘浚下絵図

（※T6-1-2） 年代未詳 28.0cm×241.2cm

旭川の下流に土砂が堆積し、川船の通行に支障を来すようになったため、掘り浚えを行うために作られた略図。城下の片瀬町から福島村までの様子が描かれている。川中に朱色で示されているのは、川船が航行可能な水尾か。藩の壱歩蔵や御船入、川口番所をはじめ、川岸の様子もうかがえる。



[参考] おかやまこず 岡山古図

（※T6-5） 寛永9年（1632）頃 原図は515.4cm×309.0cm

現存するもののうちでは、最も古い時代の城下絵図。池田忠雄時代の岡山城下町の様子を示す絵図を基にしている。池田光政が鳥取から入封する際に譲られ、家臣の屋敷割りに使われた。忠雄の家臣名の上に、光政の家臣の屋敷割りを示す紙が貼られている。